

# 水資源をめぐるムラの経験と規範

The Experiences and Norm of a Village Concerning Water Resources

柏木亨介

①問題の所在

②調査地概観

③阿蘇谷の水道施設の概要

④水資源の管理と分配

⑤水道組合設立の歴史

⑥水道組合の規制と家の経営—水道組合内部の水分配—

⑦規制力の背景としてのムラの経験と規範

【論文要旨】

人間は自身を取り巻く環境を改変させ、生活に適するかたちに作り上げてきた。つまり、生活を維持するために形成された社会環境がムラであるといえるだろう。そしてムラにはその成員が従うべき規範が存在しているが、本稿ではこの規範を軸にして現代におけるムラを捉えなおす。

これまで、ムラはその成員が生産基盤となる土地を縦有し、共同労働・共同祈願によって生産と生活の安定を図る集団として論じられ、おもに生産組織の側面から捉えられていた。だが、現代に即してムラを捉えるならば、農村を想定した土地の総有概念からではなく、生活資源の管理・利用の実態から把握するほうが適切である。そこで本稿では、農村であれ都市であれ生活に必要不可欠の資源である水道水に着目した。具体的には有限の水資源の分配をめぐる住民たちの対応を事例として挙げ、彼らの行動を規制する規範の内容、そしてそれが及ぶ範囲を分析した。

本稿の調査地、熊本県阿蘇郡の阿蘇谷は水資源に恵まれ、阿蘇谷一帯の住民を賄うだけの水量がある。しかし、住民は自分たちの水源を他所に分けようとせず、ときに他所の部落に深刻な水不足を起こさせてしまう一方で、ムラハチブ状態となった家に対しては水の使用を認めている。また別の事例では、かつて共有地であった山林を買い集めている者に対して、水道組合はその者の水の使用に制限を加えていた。このような行動の背景には、ムラ資源はみんなで管理・保全してお互いの生活を保障していくべきとする規範の存在が認められるわけで、それはムラ資源へ働きかけてきた者どうしのあいだにのみ通用し、そうでない他所者に対しては閉鎖的で厳しい態度をとるのである。

このように本稿は、水資源をめぐる規範に注目することによって、現代におけるムラの生活組織としての論理を提示したのである。